

「源頼実集」注釈稿下

吉田 茂・田中拓也・田原桜子・大石将也

凡例

一、底本には榊原家所蔵「源頼実集」（『榊原本私家集三』日本古典文学影印叢刊11、財団法人日本古典文学会編集、貴重本刊行会、一九七九年）を用いた。

一、本稿では、『源頼実集』の53～103までの歌を扱う。

一、本稿は、本文、【通釈】、【語釈】、【参考】の項目を立てて記した。

一、本文は底本を翻字し、それに濁点、句読点を施した。翻字を優先したので、必ずしも歴史的仮名遣いに従っていない場合もある。

一、本文において明らかに誤写と思われるものは、囲み文字で表記し、【語釈】でその旨を触れた。

一、【通釈】は、詞書・和歌を通釈し、意味を補った場合は、（～）でそれを示した。

一、【語釈】は、語句に関する注釈および本文の校訂を記した。語釈を施した語句は、「○」を付し、見出し語として本文を掲げた。

一、【参考】には、【語釈】で論述しきれない事柄を記した。特に問題ない場合は、【参考】を立項しない。

「源頼実集」注釈稿下

一、【語釈】、【参考】で引用する歌は、原則として『新編国歌大観』（角川書店・CD-ROM版）所載本文を用い、仮名を適宜漢字に改め掲載した。引用文献の呼称は、『古今集』『躬恒集』などと略称で掲げた。

源大納言の家に、月に歌あはせあらんとしたるを、のびて九月になりければ、十首のだいの中にはぎのありけるを、いまはときすぎにたり。もみぢにかへられければ、そのよしをうたの人ぐあつまりて、かはらけとりてよみけるに

53秋はぎのけふまでちらぬ物ならばもみぢのいろもまさらましやは

【通釈】源師房の家に、月の内に歌合せがあるだろうとしたのを、延びて九月になってしまったので、十首の歌題の中に萩があつたのを、今は時が過ぎてしまった。（歌題を）紅葉に変えられてしまったので、その事情を歌人たちが集まって、かわらけを手にとって（詠んだ歌）

秋萩が今日まで散らないものであるならば紅葉の色も勝ったであらうか。

【語釈】○源大納言 4番歌の語釈参照。「源大納言」は源師房のこと。○かはらけ 土器で作った杯。歌を詠んでから杯で酒を飲むというルールである。○秋はぎ 萩の花。秋に花が咲くのでいう。○月 月の内の意か。八月のこと。『古今集』秋上は一六九番から二四八番までであるが、萩が詠まれているのは、一九八、二二一、二二六、二二七、二二八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四番と前半部が集まっており、萩が詠まれるのは初秋から中秋である。このことから八月と考えた。『国歌大観』所載の松平文庫本は「八月」とある。

長暦二年九月十三夜、源大納言の家に、おとこをんなかたわきてうたあはせせられけるに、おとこかたの九人がうちにめされてよめる

月

54つねよりもどけき空にみつるかな世をながつきにすめる月かけ

【通釈】長暦二年九月十三日の夜、源大納言の家で、男と女を二つ

方に分けて歌合していらっしやったところ、男方の九人の中に呼ばれて詠んだ(歌)

月(という歌題で)

いつもよりも穏やかな空を見つめていると満足されることだなあ。大納言の代を長かれと祈るように、長月の澄んでいる月の光

よ。

【語釈】○長暦二年九月十三夜、源大納言の家に 長暦二(一〇三八)年九月十三日「権大納言師房歌合」が行われた。本歌合に参加した男方の歌人は、源為善、源親範、源頼実(和歌六人党の一人)、藤原経衡(和歌六人党の一人)、のりちか(伝未詳)、源頼家(和歌六人党の一人)、平棟仲(和歌六人党の一人)、橘義清、平教成の九人。だとすれば、「おとこかたの九人」も同じか。(萩谷朴『平安朝歌合大成 第三卷』一九七九年、八一六〜八二三頁より)○源大納言 4番歌の語釈参照。「源大納言」は源師房のこと。○かたわきて 歌合は二組に分かれて争う競技で、人々を左右の方に分ける。○九人がうちにめされて 男方九人の中に呼ばれての意か。○みつる 「見つる」と「満つる」とを掛ける。「満つる」は大納言の代を言祝ぐ。○世をながつき 「長月」と「世を長く」とを掛ける。「世を長く」は大納言の代が長く続くよう言祝ぐ。

【参考】この歌合の歌題は、二十卷本類聚歌合本文によれば、「秋夜月」「秋風」「露」「霧」「薄」「菊」「秋田」「紅葉」「雁」「鹿」の十題である。また、歌合には本歌は採られていない。この歌合で詠まれた二十首の中で、『後拾遺集』に採られたのは五首である。

風

55よしのやまもみぢちるらしわがやどのこずゑゆるぎてあき風ぞふく

【通釈】風(という歌題で)

吉野山では紅葉が散るらしい。私の家の梢がゆらめき動いて秋風

が吹く。

【語釈】○よしのやま 奈良県中央部の山。吉野川のほとりから大峰山に向けて高まる標高三〇〇〜七〇〇メートルの尾根をいう。吉野神宮・金峯山寺蔵王堂・吉野宮跡・吉水神社などの史跡があり、桜の名所として知られる。また修験道の霊場でもある。○ゆるぎて 物の全体がゆらゆらと動く。ゆらめき動く。

【参考】「わがやど」では秋風が吹く季節であるのに、山深い吉野では「紅葉」が散っているらしいと想像し、場所による季節の違いを歌にするところがこの歌の眼目である。

露

56みやぎの、けさのしく露ひまなくてかぜはたまをやふきみだるらん

【通釈】露（という歌題で）

宮城野の今朝の一面に広がる露は隙間がなくて、風は（今頃）真珠のような露を吹き乱しているのだろうか。

【語釈】○みやぎの、陸奥国宮城郡の平野。現在、仙台市の地名として残る。広く海岸地帯までを含めて呼ばれる場合もある。古くは秋草、特に萩の名所として知られた。歌枕。○しく 敷きつめたように一面に広がる。広く覆う。○ひまなくて 隙間がなくて。○たま 真珠または白玉。露・涙などをいう。「露」の縁語。

霧

57花みんとしめしかひなく秋きりのあしたのはらをたちわたるかな

【源頼実集】注釈稿下

【通釈】霧（という歌題で）

花を見ようと約束していた甲斐がなく、秋霧が朝の原に立ち渡っているなあ。

【語釈】○しめし 知らせて。教えて。「しめ」に「湿」を掛ける。「しめ（湿）」は「霧」の縁語。○かひなし 効果がない。無益である。

○あしたのはら 朝の原。『新拾遺集』秋下、五二三にこの歌合で詠まれた源師房の歌「にほひこそまぎれざりけれ初霜の朝の原の白菊の花」があり、「朝の原」の語が共通する。○たちわたるかな 「たち」は「霧」の縁語。歌合に八番右の歌として採られたが、結句は「たちわたりぬる」となっている。

薄

58はなす、きはにいで、なびく秋風に野辺はさながらなみぞたちける

【通釈】薄（という歌題で）

花薄の穂が出て（その穂が）秋風になびく様子が、まさしく野辺に波が立ったようであるよ。

【語釈】○なみぞたちける 野辺に見える花薄を「なみ」に見立てているところがこの歌の眼目。

菊

59くらき夜もをりつべらなり我やどのおもしろきまでさけるしら菊

【通釈】菊（という歌題で）

暗い世もくじいてしまえそうだ。私の家の美しく咲いている白菊

の花（の明るさによつて）。

【語釈】○をりつ 底本には「をかつ」とある。松平文庫本に「をりつ」とあるので、歌意を考え、「をりつ」とした。だとすれば、「くじく」の意か。和歌六人党が仰いだ能因は「錦にもおりつべらなり我がやどのいとよりかくる秋はぎの花」と「おりつべらなり」の語を詠み込む歌を詠んでいるが、まったく別の意味である。○おもしろき 美しいの意。「しろ」と色名を読み込む。

た

60をやまだの秋はてがたに見ゆるかなのこりすくなきかりやしつらん

【通釈】田（という歌題で）

小山田の秋の終わりのころに見ゆるなあ。（秋も残り少なくなつたが）残り少ない稲刈りをしているのだろう。

【語釈】○をやまだ 「を」は接頭語。山地の田。山あいにある田。

山田。○のこりすくなき 残り少ない秋と残り少ない稲を掛ける。晩秋九月の歌合に叶う表現。○かりや 松平文庫本では「かやり」を「かりや」としている。これによって改めた。だとすれば、「稲刈りする」の意か。

もみぢ

61すぎがたきいろとみゆれば紅葉ばのふかきやまぢにこまをとめつる

【通釈】紅葉（という歌題で）

（立ち止まらずに）通りすぎることが難しい（大変美しい）色と

見えるので紅葉葉の深い山路に馬を留めたよ。

【語釈】○ふかきやまぢ 「ふかき」は「深い山地」と「紅葉色の深さ」を掛ける。「ふかき」は「色」の縁語。○こま 馬。

かり

62しらくもにあとはきえつ、とをかりのきにけるこゑを空にしるかな

【通釈】雁（という歌題で）

白雲の中に、（雁の群れの）跡は消えてしまったが、遠くの雁の飛来した声を聞いていると、雁の到来（と秋の訪れ）を知ることだなあ。

【語釈】○とをかり 遠雁のことか。「遠雁」は漢詩に詠まれる語。

『白氏文集』卷二三「酬夢得霜夜对月见懐」に「凄清冬夜景 揺落長年情 月带新霜色 砧和遠雁声」と見える。松平文庫本には「とぶ」とある。これだとすれば、「飛ぶ」の意か。○空にしるかな 『貫之集』二四「月夜に衣うつ所 から衣うつこゑきけば月清みまだ寝ぬ人を空にしるかな」の歌中にみえる以外、これまで詠まれなかった結句である。

【参考】貫之の歌からの影響は確定できないが、和歌六人党が白居易から影響を受け、とりわけ『白氏文集』の詩句を歌作時に参考にしていたことはよく知られるところである。ここでも前掲の「砧和遠雁声」の詩句を踏まえ、「とをかりのきにけるこゑを」と詠んだ可能性もある。松平文庫本の「とぶかり」を受け入れて良いか、判断に迷うところである。

鹿

63こゑしげみさをしかのなく秋の夜はきく人さへぞおどろかれける

【通釈】鹿

牡鹿の鳴く声が絶え間ないので、秋の夜は（その声を）聞く人までもが目を覚ましてしまうのであるよ。

【語釈】○こゑしげみ（牡鹿が雌鹿を恋い）鳴く声が絶え間ないので。鹿の鳴き声は男の一人寝の寂しさを象徴する表現である。

【参考】この歌までが前掲の歌合の開催に寄せて詠まれた頼実の歌である。当日の歌合で採用された歌は57番歌の一首にすぎない。

ゑもんのすけの家にて、かうしんのよ、のこりのそらを

64いろ／＼にうつろふきくのなかりせばなにをかみましあきのかたみに

【通釈】右衛門佐の家で、庚申の夜、残りの空（という歌題）を

様々な色に移り変わってゆく菊の花がなかったとしたら何を見たらよいのだろう、秋の思い出として。

【語釈】○ゑもんのすけ 源兼長のことか。永承四年（一一〇四九）一月行われた内裏歌合に「右衛門佐兼長」と見える。和歌六人党の一人。○かうしんのよ 六十日に一度巡ってくる。庚申の夜は一晚中寝

ずに催し事などをする。○のこりのそら 他に見えない歌題。九月晦日の夜に詠まれた歌か。「のこりのそら」は「秋の残り」とも「庚申の夜の残り」とも解釈することができる。この作品では「かうしんのよ、のこりのそら」を歌題とした秋から冬へと変わりゆく季節の変化

を詠んだ和歌と捉えるのが自然だろう。

秋野晚望

65しめゆはぬきりのまがきの小萩原まだあかなくに日もくれにけり

【通釈】秋野晚望（秋の野の晩の眺望という歌題で）

しめ縄を結ぶこともなく霧が垣根のように広がっている小萩の花咲く野原をまだ堪能していないのに日も暮れてしまったことであるよ。

【語釈】○しめゆはぬ 神聖な領域への進入を禁止するための札や縄のこと。しめ縄。『拾遺集』恋三、八三九、よみ人しらず「しめ

ゆはぬ野辺の秋萩風ふけばとふしかくふし物をこそおもへ」に「しめゆはぬ」の歌句が見える。○あか（く）「飽く」。ここでは満足するの意。○日もくれにけり「日も暮れてしまった」の意。なお、「ひも」は「日も」「紐」の掛詞で、「しめ（縄）」の縁語となっている。

【参考】本歌が『和歌一字抄』に朱入れされる。

萩花知秋

66けさみればいろづきにけり小萩原はなこそあきのしるしなりけれ

【通釈】萩花知秋（萩の花により秋を知るという歌題で）

今朝見てみると萩の花は色づいていることであるよ。小萩の花咲く野原こそ秋の証拠であることだなあ。

【語釈】○萩花知秋 松平文庫本では「依花知秋」の「依」の右に「萩」とある。○しるし「標」。ここでは目印、証拠の意。○あきの

しるしなりけり 伊勢大輔の父の大中臣輔親の「もてならずあふぎにそへるすずしさはあまたの秋のしるしなりけり」(『輔親集』二三)がこの語の古い例である。

【参考】本歌が『和歌一字抄』に朱入れされる。

庭遍秋花

67わがやどに花をのこさずうつしうへて鹿のねきかぬ野辺となしつる

【通釈】庭遍秋花(庭の遍く秋の花という歌題で)

私の家の庭に花を残さず移し植えて鹿の声も聞くことのない野辺としたことよ。

【語釈】○庭遍秋花 底本の歌題「庭遍秋花」の「遍」の右に「辺」とあるが、見せ消ちとする。松平文庫本は「庭尽秋花」とあり、「庭」の右に「遍」と見える。○鹿のね 「鹿のね」が聞こえるのは山の奥からという設定が和歌では多い。この一首では歌題である「庭遍秋花」を踏まえて、私の庭を野辺にしたという点に眼目がある。

【参考】『後拾遺和歌集』秋上に次の和歌が収められている。

橘義清が家に歌合し侍けるに、庭に秋の花をつくすといふこゝろをよめる

源頼家朝臣

我宿に千草の花をうへつれば鹿の音のみや野べにのこらん(二二二二)

源頼実

わかやどに花をのこさずうつし植て鹿の音きかぬ野べとなしつる(二二二二)

ながをかにて、山家に月をまつ

68月かげのふもとのさとにをそきかなみねをこえてぞまつべかりける

【通釈】長岡で、「山家に月を待つ」という歌題で

月の光が麓の里を照らすのがなんとも遅いことであるなあ。(私が)峰を越えてそれを待つべきであるよ。(そうすれば月を早く見ることができるといふので)けれど山家にいるので、それはできない

【語釈】○ながをか 長岡。13番歌【語釈】参照。○山家 やまが。

山里にある家。○みねをこえてぞ この大胆な発想と読みぶりがこの歌の眼目。

落葉満庭

69あさゆふにあらしのはらふ庭のおもにちりしつもれるもみぢなりけり

【通釈】落葉満庭(落葉庭に満つという歌題で)

朝夕と吹く強い風が(落ち葉を)払っている庭の面に紅葉は散っては塵となり積もっていることよ。

【語釈】○ちりし 「ちり」は「散り」「塵」の掛詞。また、「はらふ」は「塵」の縁語。「し」は強意の助詞。

【参考】『和歌一字抄』に本歌が朱入れされる。

千栽秋花

70わかやどは花のやどりとなりにけり野辺のあるじと人やみるらん

【通釈】千栽秋花(前栽の秋の花という歌題で)

私の家は花の宿となつてしまつたことであるよ。秋の花を野辺の（宿の）主人と人々は見ていることだらう。

【語釈】○千裁 前裁のこと。○わがやどは底本は「わがやどの」とあるが、ここでは松平文庫本の「わがやどは」を採用する。○花のやどり 花がたくさん咲いている場所。この表現は他に見えず、頼実の独自の表現である。

月夜のしぐれ

71さだめなきそらにあるかなみる程にしぐれにくもる冬の夜の月

【通釈】月夜のしぐれ（という歌題で）

晴れたり曇ったり定めのない空に（冬の夜の月が）あることだよ。空を見ている間に時雨の雲に冬の夜の月が隠れて曇っていくよ。

【語釈】○しぐれ 時雨。秋の末から冬の初めの頃にかけて降ったり止んだりする雨。○そらにあるかな 松平文庫本は「そらにもあるな」とある。○みる程に 見ている間に。

【参考】「冬の夜の月」という歌句は、『拾遺集』冬、二四一、恵慶法師の「あまの原そらさへさえや渡るらん氷と見ゆる冬の夜の月」が古い例で、これ以後多用される歌句である。和歌六人党の一人でもある経衡も「たびねするわれのみならずみやこにも見ぬ人あらじ冬の夜の月」の歌を詠み、頼実や経衡らが恵慶法師を仰いで歌作をした事績もあるので、何らかの影響があると思われる。

のこりのきく

72春秋のはなといふ花のいろ／＼をのこれるきくにうつしてぞみる

【通釈】残りの菊（という歌題で）

春秋に咲く花という花の様々な色を秋の末に残って咲く菊の花にうつして見ることであるよ。

【語釈】○春秋のはな 春秋に咲く花の意。この表現は特殊な表現。○のこりのきく 残菊。秋の末まで残って咲いている菊の花。○のこれるきくに 様々な色に変化する残菊をいうか。

【参考】本歌が『和歌一字抄』に朱入れされる。

右大弁のさそひ給しかば、むめづにまかりて、河辺水秋夕風

73秋風のをぎの葉すぐるゆふぐれに人まつひとの心をぞしる

【通釈】右大弁が誘いなさつたので、梅津に参上して、河辺水秋夕風

（という歌題で）

秋風が萩の葉の間を通り抜けていく夕暮れに、愛しい人を待つ人の（寂しい）心情を知ることよ。

【語釈】○右大弁 源資通のこと。頼実は長暦・長久年間に、源資通邸やその山家で歌会を催している。（『和歌文学大辞典』）○むめづ いまの京都市梅津付近、桂川左岸の地。水陸交通の要衝で、桂川を利用して、丹波材の陸揚地であった。51番歌にも詠まれている。

【参考】『重之集』二二六八「萩の葉に吹く秋風を忘れつつこひしき人のくるかとぞみる」の歌が「萩の葉」「秋風」を用いて恋人の来訪を待つ気持ちを表現するが、本歌はこの歌の心情に近い。

長久三年うるう九月のつごもりに、関白殿ありまのゆにおはしまして、そのあひだ宮にさぶらふ人々、よしきよ、しげなり、つねひら、ためなかなどして、臨池
74水のおもによものやまべもうつりつ、かゞみとみゆるいけのうへかな

【通釈】長久三年閏九月の末に、関白殿は有馬に湯治にお出かけになり、その間宮中に伺候している人々、義清、重成、経衡、為仲などで、池を臨む（という歌題で）

水面に四方の山々が映っている様子は、鏡と見間違えるような池の上であることよ。

【語釈】○長久三年うるふ九月のつごもり 西暦一〇四二年閏九月二日から二七日のこと。○関白殿 藤原頼通のこと。○ありまのゆ いまの兵庫泉神戸市にある有馬温泉のこと。『百鍊抄』に「長久三年閏九月廿三日、関白左大臣下向有馬温泉、閏九月二十七日、遣勅使左衛門権佐泰憲問取勞」とある。また、『新勅撰集』羈旅、権大納言長家、五一六の詞書に「宇治関白ありまの湯見にまかりけるみちにて、秋のくれをしむ歌よみ侍りけるに」とある。○よしきよ 橘義清のこと。

和歌六人党の一人。長久二年秋に開催した歌合は、『後拾遺集』に「庭尽秋花」の題を伴って載っており、本歌集の67にも見える。長暦二年九月十三日の『源大納言家歌合』一八番歌に、「右 よしきよ おとづれぬたびのなきかなかりがねのゆきかふくもちはるかなれども」とあり、同一人物。○しげなり 源重成のこと。改名して兼長を名乗る。和歌六人党の一人。『後拾遺集』に五首入集。○つねひら 藤原経衡

のこと。和歌六人党の一人。家集に『経衡集』がある。○ためなな橘為仲のこと。橘義清は弟。和歌六人党周辺の歌人。○よものやまべも 四方の山々。「ありまのゆ」のある山辺を想起して歌に詠み込んだか。

見泉

75むかしよりをとき、たかきいづみかな人のせきいる、水ならねども
【通釈】泉を見る

遙か昔から名の知れた泉であることだなあ。人が堰き止めて引き入れた水ではないのだけれども。

【語釈】○見泉 歌題としての用例は見当たらない。○をと 『後拾遺集』夏、二二三、師賢の「さよふかき泉の水の音さけばむすばぬ袖もすずしかりけり」の歌の如く、「泉」の「音」と詠まれることが多い。○せきいる、水をせき止め、引き入れること。「水」と合わせて詠まれる用例は多数あるが、「泉」と合わせて詠まれる用例は少ない。

翠松

76色ふかしこだかく松はなりにけりいく夜そめつるみどりなるらん

【通釈】翠松

松の葉の緑は深い。木の丈は高くなつてしまつたよ。幾夜も染めた緑色であるからだろう。

【語釈】○こだかく松はなりにけり 松が大きく成長したことに、藤原氏の繁栄を重ね合わせているか。「こだかき」「松」の組み合わせ

には、「藤氏のうぶやにまかりて よしのぶ ふたばよりのもしき
かなかすが山こだかき松のたねぞとおもへば」〔拾遺集〕賀、二六七、
能宣)がある。○いくよ「よ」は「夜」と「代」を掛けており、藤
原氏の繁栄を言祝いでいる。○そめつる「色」の縁語。

紅葉

77 ぐずゑよりちるだにおしき紅葉ばのかぜのをとさへまれになりゆく

【通釈】紅葉

木の枝先から散ることが惜しまれる紅葉葉は、(葉がいよいよ
散って)風の音までも稀になってゆく。

【語釈】○をとさへまれになりゆく「風」に対して用いている用例
は他にない。本歌では、紅葉の葉が少なくなったことを表現している。
頼実の歌は聴覚で感じたものを詠みこむ特色があるが、本歌もその例
である。

【参考】風の音の少なさから落葉せず梢に残る紅葉の少なさを想像し
ているところがこの歌の眼目である。

明月

78 月かげの見るにくまなき秋の夜はたのめぬ人もまたれこそすれ

【通釈】明月

明るい満月の秋の夜は、来ることをあてにできない人を、自然と
待たれることよ。

【語釈】○またれこそすれ「またるる月」は陰暦一五日を過ぎて、

「源頼実集」注釈稿下

夜遅くなってから出る月のことだが、これを意識した表現か。『道済
集』八一「さよふけてあひやしぬらんたなばたもよそなる人もまたれ
こそすれ」と先行の歌があるが、用例はすくない。

初雪

79 あさまだき人のふみゆくみちしばのあと見ゆばかりをける霜かな

【通釈】初雪

まだ夜が明けきらない早朝に、人が踏み進んで行った跡が道端の
芝草からわかるほど、霜がおりていることよ

【語釈】○あさまだき 夜がまだ明けきらない早朝 ○みちしばの
道端に生えている芝草。「みちしばの露」という表現は多いが、「みち
しば」に「霜」を配した歌は極めて少ない。○をける霜かな 置いた
初霜。これを「初雪」と見立てたか。

残菊

80 秋ふかくなりゆくまゝにきくのはなひにそへてこそいろはそめけれ

【通釈】残菊

秋が深まっていくにつれて、重陽の節句を過ぎてなお咲いている
菊の花は、日が経つに従ってますます色が強くなっていくことよ。

【語釈】○残菊 重陽の節供(陰暦九月九日)を過ぎて咲いている菊
の花。また、秋の終わりから冬の初めに咲いている菊の花。咲き残っ
た菊の花。○ひに 日に。色の「緋」を掛けるか。古代菊には「緋」
の色の菊があった。これであれば、「ひ」は「そめ」とともに「色」

の縁語。

【参考】秋が深まってもなお咲いている菊の花の色について詠んだ歌として、「秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば」(『古今集』秋下、二七九、平定文)がある。

搗衣

81から衣うつこゑしげくきこゆなりさむきあらしのをとにそへつ、

【通釈】搗衣(砧で衣を打つという歌題で)

唐衣を砧で打つ声がしきりに聞こえてくるようだ、冬の冷たく強い風の音とともに。

【語釈】○搗衣 砧で衣を打つこと。○から衣うつこゑ 「からこゑもうつこゑきげば月きよみまだねぬ人をそらにこそきけ」(『古今六帖』第五、三三〇三、素性)などの用例がある。○あらしのをと 「ひもくれぬ人もかへりぬ山ざとはみねのあらしのおとばかりして」(『後拾遺集』雑五、一一四五、源頼実)のように用例が多いが、本歌とともに古い例。

遠雁

82よと、もにそらにきこゆるかりがねはしらぬくもぢもあらしとぞおもふ

【通釈】遠雁

夜の訪れとともに空いっぱい聞こえる雁の鳴き声を聞くと、知らない雲の通り道もあるまい(うまく飛んでいくこと)と思う。

【語釈】○遠雁 遙か彼方の空を渡る雁。○かりがね ガンカモ科の渡り鳥で、秋に北方から飛来し、春に帰って行く。「秋風にはつかりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらむ」(『古今集』秋上、二〇七、紀友則)とあるように、秋の訪れを知らせる鳥として詠まれる。○しらぬくもぢも 「おもひやれしらぬくもぢもいるかたの月よりほかのながめやはする」(『後拾遺集』恋三、七二六、康資王母)の例が他にあるが、稀な歌句である。

【参考】『白氏文集』卷二三「酬夢得霜夜对月见懐」の詩に「月帯新霜色 砧和遠雁声」とあり、砧の音と遠雁の鳴き声が詠みあわされていることから、81番歌の歌題との関連性があると考えられるか。

惜秋

83くれてゆくそらにこゝろぞとまりけるけふらし秋のせきとおもへば

【通釈】惜秋(秋を惜しむという歌題で)

日が暮れてゆく夕空に心がとどまることよ。今日がそうであるらしい。秋の終わる関と思われるので。

【語釈】○そら 夕空。○秋のせき 秋から冬と変化する季節の分かれ目を「秋のせき」と表現する。『能宣集』二〇「十月、あじろにもみちながれよりたるを、とどまりて見はべり もみぢばのおれるあじろはあかずしてすぎにしあきのせきにぞありける」の歌に見えるように、秋と冬の分かれ目を「秋のせき」と表現している。これは川の井関を想定するが、この頼実の歌は井関ではなく、空に関を見ているところに眼目がある。

【参考】74番歌から本歌まで、湯治に行った頼通の留守中におこなった歌会の歌か。すべて秋の歌で統一される。

長久三年右大弁山家にて、夜深待月といふ題

84月かげをまつに夜ふけぬ秋の夜はあくるほどだにひさしからなん

【通釈】長久三年右大弁の山荘で「夜深く月を待つ」という歌題（で詠んだ歌）

月の姿を待っているために夜が更けてしまった。（その）秋の夜は（いつまでも）明けないでほしいよ。

【語釈】○長久三年 西暦一〇四二年。○右大弁 50番の歌で検証したように、右大弁は源資通（一〇〇五〜一〇六〇）のことか。○山家山荘。場所未詳。○夜深待月 『万代集』雑二、二九九七「夜深待月といふことを 大江嘉言 よはふけぬいまはいつともつきかげを見るほどもなくあけぬべきかな」の歌もこの歌題である。○あくるほどだにひさしからなん 夜が長く続き、いつまでも美しい月を見たいという心持ちである。

【参考】大江嘉言（？〜一〇一〇？）は頼実よりも前の歌人であるが、和歌六人党の歌人たちが仰いだ能因らと交流し歌作をした歌人であるので、嘉言の歌に影響を受けたと考えられるか。用語を含めて、両歌の趣向は近似している。

ふゆ十月一日山さとに人ぐり行て、もみちをみてかはらけとりて

「源頼実集」注釈稿下

85もみち葉のちりしのこれば山さとにあきをとりてみるこゝちする

【通釈】冬十月一日、（ある）山里に人々が行って、紅葉を見て、かわらけを手を取って（詠んだ歌）

紅葉した葉が散り残って見えるので、（本日は冬の初日であるが）山里には秋を留めている気持ちがするよ。

【語釈】○冬十月一日 冬は十月から始まるので冬の初日のこと。○山さと 場所未詳。○かはらけとりて 土器で作った杯。歌を詠んでから杯で酒を飲むというルールである。『輔親集』二の詞書「人ぐり御前にあまたあるよ、月のあかきにかわらけとりて、あきの夜の月水に映ずといふ題を」とあるのも同じ趣向。因みに輔親（九五四〜一〇三八）は大中臣能宣の子、伊勢大輔の父である。頼実より少し前の歌人。○みるこゝちする 躬恒の「ももしきのおほみやながらやせしまをみるこちするあきのよの月」（『躬恒集』一〇、『拾遺集』雑秋、一一〇六）以来よく詠まれる歌句である。

【参考】83番歌で見た能宣の歌とともに、「もみちばをよするあじろはおほかれどあきをとりてみるよしぞなみ」に「あきをとりて」の語が見える。

かやうめん殿の（きカ）池に船に乗りて、月秋といふたいを

86あきごとにさやけき月は今宵こそわがみつるよのためしなりけれ

【通釈】賀陽院殿の池に船に乗って、月秋（月の秋）という歌題で（詠んだ歌）

秋が来るたびに冴え冴えとしている月は、今宵こそ私が見た、満

ちている世の例であったよ。

【語釈】○かやうゑん殿 賀陽院殿。頼通の広大な邸。いまの京都市中京区二条にあった。○池に船に乗りて 賀陽院殿にある池（四つの池があったという）に船を浮かべ、それに乗って歌作したこと。長元八年（一〇三五）五月一六日「賀陽院水閣歌合」が行われた場所。○月秋 あまり見られない歌題。○みつる 「見つる」と「満つる」とを掛ける。「満つる」は頼通を言祝ぐ。○よ 「夜」に「世（代）」を掛ける。

紅露寺にて、もみちころもにおつといふだいを

87もみち葉はわが衣手にか、れどもきてみる人のあかずもあるかな

【通釈】紅露寺で、「もみち衣に落ちる」という歌題を

紅葉した葉がわたしの袖に掛かったとしても（それを）着てみる人にとつては十分満足できるものではないことよ。

【語釈】○紅露寺 「紅露寺」は未詳。松平文庫本に「栖霞寺」とある。「栖霞寺」であれば、源融の別荘「栖霞観」を寺とし、「栖霞寺」と号した寺をいう。いまの京都市右京区嵯峨にある。のち、境内に「清涼寺」を建立した。松平文庫別本には「紅霞子十月」とあるが、意味不明。○かゝれども 底本には「かくれども」とあるが、歌意を考え、松平文庫本の「かゝれども」によつた。「きて」は「衣」の縁語。○あかずもあるかな 満足できないことよ。「めづらしき声ならなくに」とときすこらの年をあかずもあるかな（『古今集』賀、三五九、友則）の歌以来、良く詠まれた結句。

88けさみれば川辺のこほりひまなくて川せにのみぞなみはたちける

【通釈】

今朝見ると川のあたりの氷はすきまもなく（凍っていない）て川瀬のあたりだけは波が立っていることよ。

【語釈】○川せにのみぞ 底本には「川かぜにのみ」とあるが、歌意を考え、松平文庫本「かわせにのみぞ」に改めた。これであれば、川の瀬だけは、の意。「瀬」は流れが早いので、凍っていないということ。「なみ」は「川」の縁語。

筏

89河水にまかせておとすいかだしはさしてゆくゑもしられざりけり

【通釈】筏

河の水にまかせて（下流に舟を）下らせていく筏師は棹をさしてゆくのであるが、その行方はわからないことよ。

【語釈】○筏 山で切り出した木材を筏に組んで河を下つて運ぶもの。運搬に従事する者を「筏師（いかだし）」という。『能宣集』四七二「くれごととやどりやすらんおほるがはさしてゆくへもみえぬいかだし」の歌には「さしてゆくへも」「いかだし」と頼実の歌と同じ用語が見える。頼実の歌は能宣の歌の影響下にあるか。○しられざりけり 激しい波に翻弄される筏師の未来を表現しているのであるが、決して筏師の未来を心配しているのではなく、物珍しい風景を貴族の視点から表現しているにすぎない。

ゆきふりたる日、大納言の家にうたよむ人八人よびて松雪といふだいを

90雪ふれば松こそいたくおひにけれちとせの冬をつみやしつらん

【通釈】雪が降った日、大納言の家に歌人を八人呼んで「松の雪」という歌題を

雪が降ったので松はひどく老いたことよ。千歳の冬を積み重ねたのであろうか。

【語釈】○大納言 4番歌の詞書に登場する「源大納言」で源師房のこと。○おひにけれ 松の上に降り積もった雪を白髪に見立て、「おひにけれ」とした。「老松」を詠む歌はあるが、雪の降り積む松を「老松」と表し、言祝ぐ表現は他にない。○ちとせの冬をつみやしつらん 千歳の冬を積むという表現で、主人である源師房の長寿を言祝いでいる。「つみ」は「雪」の縁語。

十月廿日殿のあまうへはせにまうでさせ給ひてかへらせ給ひしに、うち殿に御むかへにまいれる人ぐあじろにまかりて、あじろに月を見るときいふだいを

91月かげもいはなみたかきあじろにはうすきこほりのよるかどぞみる

【通釈】(ある年の)十月二十日、殿(頼通様)の尼上様が初瀬に参詣なさつて、お帰りなされた時に、宇治殿にお迎えに参上した人々が網代車に下がって、その「網代車から月を見る」という歌題を

月の光の下で岩にうち寄せる波が高い網代には薄い水が張って

「源頼実集」注釈稿下

寄ってくるように見えることよ。

【語釈】○十月廿日 年は未詳。○殿のあまうへ 殿(頼通)の母である源倫子(九六三―一〇五三)のことか。倫子であれば、長暦三年(二〇三九)に落飾、清浄法と号する。○はせ 大和国の初瀬(長谷)寺。観音信仰の霊場として知られる。○うち殿 宇治殿。頼通の別荘。○あじろにまかりて 底本は「あじろまかりて」とあるが、松平文庫本の「あじろにまかりて」を採用した。網代車か。中級貴族の常用。別解は、氷魚を捕る「網代」のある場所の意。○あじろには 網代車から「網代」に転化したところがこの歌の眼目。

【参考】『経信集』一五四「月きよみせの網代によるひをはたまもにさゆるこほりなりけり」の歌の如く、「月」「網代」「氷」が配される歌として本歌は古い例か。

この歌が詠まれた年時は未詳だが、倫子の落飾が長暦三年(一〇三九)で、頼実が没したのが長久五年(一〇四四)であるから、その間の出来事だと推測できる。

常願寺にて人ぐ月前紅葉といふ題よみける

92いとしくもみぢちりしく庭のうへにひかりをそふる冬の夜の月

【通釈】常願寺で殿上人たちが「月の前の紅葉」という歌題で詠んだ(歌)

ますます紅葉が散り敷いていく庭の上に光を添えていく冬の夜の月であるよ。

【語釈】○常願寺 いまの京都市上京区寺町にある寺か。松平文庫本

には「道願寺」とある。いずれも未詳。○冬の夜の月 『拾遺集』冬、二四二「月を見てよめる 惠慶法師 あまの原そらにさへさえ渡るらん氷と見ゆる冬の夜の月」(『惠慶集』一一六)が古い例である。和歌六人党の歌人たちが惠慶法師から影響を受けている点からすると、頼実は意識してこの語を用いたか。

【参考】『後拾遺集』秋上、二五一、平兼盛の「にこりなく千代をかぞえてすむ水に光をそふる秋の夜の月」の歌の如く、「光をそふる秋の夜の月」と詠まれることが多かったが、「秋の夜の月」ではなく、「冬の夜の月」を詠んでいるところが新しい。

落葉如雨

93 木の葉はちるやどはき、わくことぞなきしぐれする夜もしぐれせぬよも

【通釈】落葉雨の如し

木の葉が散る家は聞き分けることができない。時雨の降る夜も時雨の降らない夜も

【語釈】○落葉如雨 頼実や家経らが用い始めた歌題。

【参考】本歌は、『後拾遺集』冬、三八二に「落葉如雨といふ心をよめる 源頼実」の詞書で入集する。その直後の歌が藤原家経の「もみぢちる音はしぐれの心地してこずえのそらはくもらざりけり」の歌で、これが聴覚と視覚を駆使した歌であるのに対し、聴覚に限定した歌が頼実の歌である。この歌は評判が良かったため、『袋草紙』上(六四)、『古来風体抄』下(四二九)、『無名抄』(六七)、『今鏡』異本歌(一

三五、105番歌の『参考』に引用文あり)などに採られる。また、両歌は、『和歌一字抄』下、九六六、九六七に逆の順で採られている。

また、後世への影響として、『新古今集』冬、五六七、藤原資隆の「時雨かときけば木の葉のふるものをそれともぬる我がたもとかな」や定家の「しぐるるも音はかはらぬ板間より木の葉は月のもるにぞありける」(『拾遺愚草』上、五四)の歌を挙げることができる。

落葉旧苔上

94 うちかさねいくよのかぜかたちつらん木の葉ぞこけのころもなりける

【通釈】落葉旧苔の上

重ねるように幾代の風が立ったのだろうか。散った木の葉は苔の衣であるよ。

【語釈】○落葉旧苔上 他に見えない歌題。松平文庫本には「落葉裳苔上」とある。頼実らは漢詩文を意識した歌題、歌を詠んでいる。それからすると、漢詩に見られる「旧苔」(都良香「氷消波洗旧苔鬚」などに見られる)が良いか。○いくよのかぜ 幾代にも渡る風。これが「旧苔」に呼応する。○こけのころも 「いはのうへに旅寝をすればいと寒し苔の衣を我にかさなん」(『遍昭集』一七)の歌の如く、よく詠まれる歌句。

恋

95 よをかさねふけるの浦にあまのたくおもひなりせば人もしらじな

【通釈】恋

夜を重ね、ふけぬの浦で海人がたく火ではないが、（あなたに對する）思いの火は他の人は知るまい。

【語釈】○ふけるの浦 いまの大阪府泉南郡岬町にある「吹飯の浦」を指す。歌枕。「おきつかぜふけるの浦にたつなみのなごりにさへや我はしづまむ」（『伊勢集』三八四）の歌のように詠まれる。○あまのたくおもひ 海人が藻塩を焼く火。「おもひ」に「火」を掛ける。「あま」「たぐ」は「浦」の縁語。○人もしらじな 人も知るまい。『定頼集』一一八「ふきそめし日より身にしむ秋風も萩の葉ならぬ人はしらじな」の歌が古い例で、のち恋の歌に多用される表現。

【参考】本歌から最終歌（108番歌）まで「恋」という歌題で詠まれた歌が連続する。

96おもひかねしらぬ磯辺にことよせてうちいづるなみのかひもあららん

【通釈】

思ってもどうにもならず、名の知らぬ磯辺にこと寄せてうち返す波が貝をあらわすようにこの恋にかいがあればなあ。

【語釈】○うちいづるなみの うちかえす波のこと。○ことよせて かこつけて。「よせ」は「波」の縁語。○かひ 「貝」に「甲斐」を掛けるのは常套。

97ふかみどりおもひそめてはひさしきをいかでか見ましすみよしの松

【通釈】

深緑色に思い染めたわたしの長く変わらぬ思いを（あなたは）どのように御覧になるのか、住吉の松（のごとき我が思いを）。

【語釈】○ふかみどり 住吉の松の色を指し、心変わらぬ思いをも暗示する。○いかでか見まし 松平文庫本には「いかでみまし」とある。○すみよしの松 いまの大阪市住吉区にある住吉大社の松。永久不変の象徴。歌枕。『拾遺集』神楽歌、五八九、安法法師の「あまくだるあら人神の相生をおもへば久し住吉の松」、同五九〇の「我とはば神世の事もこたへなん昔をしれる住吉の松」の歌のように「ひさし」「昔をしれる」の歌句のとおり、永久不変を表す。賀の歌で詠まれることが多いが、それを恋の歌で詠んでいるところがこの歌の眼目。

98をととは山たにのしたみづをとにのみきゝてわたらぬそでもぬれけり

【通釈】

音羽山の谷を流れる下水を音にだけ聞いて渡らなくても我が袖は（あなたに逢えず流す涙のために）濡れてしまったことよ。

【語釈】○をととは山 いまの京都市山科区東部の山。歌枕。○をとにのみ 『古今集』恋一、四七三、在原元方の「音羽山おとに聞きつつあふ坂の関のこなたに年をふるかな」の歌の如く、同音から「音羽山」は「音」を導く。○したみづ 谷の下を流れる水。○をとにのみきゝて 噂に聞くだけで。逢瀬のないことを言う。『忠見集』一八八「おとにのみきてわたらぬあふさかの関のしみずにながれぬるかな」の歌の世界に近い。○そでもぬれけり 恋の煩悶のために流す涙による。

99おもふ事なるとのうらにすまぬ身のしほたれころもかはくよぞなき

【通釈】

思うことがあり、鳴門の浦に住む身ではないが、(逢うことのできぬ身の上なので、流す涙のため)潮垂れ衣も乾く夜などない。

【語釈】○なるとのうら 鳴門の浦。いまの徳島県鳴門の浦。『相模集』三八〇「思ふ事なるとの浦にひろひつつかひありけりとしらせてしがな」と詠まれる。○すまぬ身 住まない身。これで逢うこともできぬ身と言う。○しほたれころも 潮水に濡れて雫の垂れている衣。転じて、涙に濡れた衣。○よ 夜に、男女の仲の意である「よ」を掛けるか。

【参考】ここまで96番歌を除く、「ふけるの浦」(95番歌)、「すみよしの松」(97番歌)、「をとほ山」(98番歌)、「なるとのうら」(99番歌)という歌枕を詠み込み、恋歌にしているものが連続している。

100しるべする人だに見えぬおくやまのふみ見ぬ道にまどふころかな

【通釈】

道案内をする人さえ見えない奥山の踏み歩いたことのない(恋の)道に迷ってしまったところであるよ。

【語釈】○ふみ見ぬ道に 『後拾遺集』恋一、六二七、道命法師の「おもひわびきのふ山べにいりしかどふみみぬ道はゆかれざりけり」の歌に用例が見えるが、少ない表現である。「ふみ」は「文」「踏み」の掛詞か。○まどふころかな 『後拾遺集』恋三、七二五、後朱雀院の「あやめぐさかけしたもとのねをたえてさらにこひちにまどふころかな」

の歌の如く、この時代以降多用される表現。この歌も「こひち」はないが、恋路に惑うことを言う。

101としふれどいはぬおもひはかひぞなき人にしらるゝけぶりならねば

【通釈】

年月を過ごしたが(相手に)告白しない思いは甲斐のないことだ。(私は)自然に知られる煙ではないので。

【語釈】○おもひ 「思ひ」の「ひ」に「火」を掛ける。○かひ 甲斐に「貝」を掛ける。○けぶりならねば 「けぶり」は「かひ」の縁語で、藻塩を焼く煙のこと。この結句は恋歌に多用される表現。

【通釈】

102いかにせん恋路にまよふほとゝぎすしのびになきてすこす比かな

【通釈】

どうしようか。恋路に迷っているほととぎすではないが、それが

【語釈】

忍び泣きするように人知れず涙を流して過ぐす頃であるよ。

【語釈】○しのびになきて ほととぎすは、忍び音に鳴くとされる。

『後拾遺集』雑四、一〇九六、六条院宣旨の「しのびねをききこそわたれほととぎすかよふかさねのかくれなければ」の歌もその例。

103われがごと恋せん人のまた(も力)あらばいかにかするととふべき

【通釈】

ものを

私のように恋をしている人がいるならば、どのようにするのかと

問いたいものであるが。

【語釈】○われがごと 底本には「わががごと」とあるが、ここでは松平文庫本の「われがごと」を採用する。私のように。漢文訓読的表現か。この時代までに見られない表現。

【参考】恋歌は以上の九首で終わる。

入撰集洩此集歌（勅撰集に入集したが、この集から洩れてしまった歌）

藏人にて侍ける時、御祭の使にて難波にまかりてよみ侍ける

104 おもふ事神はしるらん住吉の岸の白波たよりなくとも

【通釈】藏人でありました時、（住吉社の）祭礼の使者として難波に

下向して詠みました（歌）

（私が）思う事を神は知っているのだろうか、住吉の岸の白波がうち寄るように、（神への）便りがないとしても。

【語釈】○藏人 頼実が藏人に補されたのは、長久四年（一〇四三）

一月。○御祭 ここでは住吉社の祭礼のこと。○使 勅使。○難波

住吉社近くの難波の浦をいうか。○おもふ事 思っていること。『袋草紙』上に「源頼実無術執此道、參詣住吉、秀歌一首令詠可召命之由祈請すと云々」とあることを受けていえば、秀歌を詠みたいということになる。住吉は歌道の神を祀るとされる。○住吉の岸 「住吉」は97番歌の語釈参照。○たよりなくとも たよりの「より」は寄りの意

「源頼実集」注釈稿下

を掛け、「波」の縁語となる。右に「たよせなりとも」と傍書あり。

【参考】『後拾遺集』雜四、一〇六七に同じ詞書で、結句が「たよせなりとも」となり採られている。一方、『五代集歌枕』下、一六六〇では、結句「たかせなりとも」となる。

105 日も暮ぬ人も帰りぬ山里はみねの嵐の音ばかりして

【通釈】

日も暮れた。人も帰ってしまった。山里は峰の山風の音だけがしている。

【語釈】○日も暮ぬ 『後拾遺集』詞書の「日暮れにければ」を受けた表現。○みねの嵐の 「みねのあらし」の語が勅撰集に見えるのは、『後拾遺集』が初めてである。『拾遺集』から『後拾遺集』までの歌人たちが好んで詠んだ歌句である。

【参考】『後拾遺集』雜五、一一四五に「山庄にまかりて日暮れにければ」の詞書で本歌が採られている。

稲荷社ちかき所にて、夕郭公といふことを人々読侍ける時

105 いなり山越てやきつる時鳥ゆふかけてのみ声のきこゆる

【通釈】稲荷社近いところで、「夕べの郭公」という歌題を歌人たちが詠みました時（詠んだ歌）

稲荷山を越えて来たのかほととぎすは（夕影のなか）神の木棉を身にかけて声が聞こえることよ。

【語釈】○稲荷社 いまの京都市伏見区深草にある伏見稲荷大社の古

名。○夕郭公 底本には「夕時雨」とあるが、『玉葉集』の詞書と歌意により、「夕郭公」と改めた。○いなり山 稲荷社のある山。標高二三三メートル。応仁の乱で消失する前には稲荷社は山中にあった。○ゆふかけて 「ゆふ」は楮の皮を剥ぎ、それを蒸して水にさらしたうえ、糸状にしたもの。神事に用いた。「ゆふかけ」は神事るとき、榊にかけて神に捧げたりすること。それに「夕かけ」を掛けた。「ゆふ」は「稲荷」の縁語。

【参考】『玉葉集』夏、三二八に「稲荷の社近き所にて、夕郭公といふ事を人々読み侍りける時」の詞書で本歌が採られている。また、『今鏡』打聞には「稲荷山越えてや来つるほととぎすゆふかけてしも声の聞こゆる」と、四句に異なる歌が採られている。この逸話は有名なので、以下に引用する。

左衛門尉頼実といふ藏人、歌の道すぐれても、また好みにも好み侍りけるに、七条なる所にて、「夕べに郭公を聞く」といふ題を詠み侍りけるに、酔ひて。その家の車宿りに立てたる車にて、歌案ぜむとて寝過ぐして侍りけるを、求めければ、思ひ寄らで、すでに講ぜむとて人みな書きたる後にて、このわたりは稲荷の明神こそとて念じければ、きとおぼえけるを書きて侍りける、

稲荷山越えてや来つる郭公ゆふかけてしも声の聞こゆる

同じ人の、「人に知らるるばかりの歌、詠ませさせ給へ。五年が命に代へん。」と住吉に申したりければ、「落葉雨のごとし」といふ題に、

木の葉散る宿は聞き分くことぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も

と詠みて侍りけるを、必ずこれとも思ひ寄らざりけるにや、病のつきて、生かむと祈りなどしければ、家に侍りける女に住吉の憑きて、「さる歌詠ませしは。されば、え生くまじ。」とのたまひけるにぞ、ひとへに後の世の祈りになりけるとなむ。